『新板役者誉ことば』影印・翻刻と注解

松崎　仁

近世の歌舞伎では、登場する人気役者を賞讃する言葉を長々とつらねる習慣があり、これを「褒め詞」と呼んだことはよく知られている。その文句を印刷した薄物の冊子も多数現存している。しかし、それらは江戸歌舞伎のもので、なぜか上方のものの現存は非常に少ないらしい。広瀬千紗子氏の労作「享保以後せりふ本目録稿」「同補遺」（演劇研究会会報一〇・一一号）にも上方版は掲げられていない。

とはいえ、かつて忍頂寺務氏は「上方役者ほめ詞」という一文を雑誌「上方」十三号（昭和七年一月）に載せて、次の五種の刊本と一種の板木を見たことを報告しておられる。すなわち忍頂寺氏は、「兵庫の宮崎家」所蔵の歌謡に関する板木の中に、「やつちや〳〵」という文句が末尾に記された板木が三面あり、それを墨摺りにしたものを見て、これを褒め詞の刊行されたものと推定したということを述べたのち、これに続けて次のように記された。以下これを原文のまま写し取っておく。

其後これを上方主人に話した所、同文庫にも五種の刊本を珍蔵せらるゝとて一見を許され、茲に比較研究の機会を得たのであつた。其種類は左の通りである。

一、役者ほめことば、新板、綿屋喜兵衛板
　紋尽し、　酒尽し、　餅尽し、　廓尽し、　紙尽し、
　花尽し、　魚尽し、　鳥尽し、　青物尽し、
　十二月、　はしり尽し、
二、役者ほめ詞、作者間引生姜、板元綿屋
　宮尽し、　拳尽し、　わげ尽し、
三、新板ほめ詞、作者森田氏、板元綿屋
　虫づくし、　有馬づくし、　江戸町づくし、
四、役者ほめことば、板元和泉屋
　いろは尽し、　髪づくし、　六歌仙、
　十二のゑと尽し、
五、顔見世御祝儀ほめことば、板元綿屋
　いろは尽し、　献立家具づくし、
六、兵庫にある板木
　魚づくし、　紙づくし、　煙草づくし、

此の中第二と第三には作者の名前がある。何人か未詳で有るが

恐らく市井の通人か文学者で有らう。

さて、ここには五種の刊本と三面の板木（六の「兵庫にある板木」）の存在が紹介されているが、現在これらの文献や板木の所在は知られていないようである。忍頂寺氏が「上方ほめ詞の遺存数」は少ないと書いておられるくらいだから、当時にあってもこれらは珍重すべきものだったに違いない。戦災などで失われたとしたら、まことに惜しいことである。

幸に忍頂寺氏はそのうちの二つを翻字掲載しておられるので、それも写し取っておく。前に写し取ったリストの一の、綿屋喜兵衛（大坂の書肆）板の中の二つである。

しばらく〳〵、上さじき下さじき、暫しが内じや御免なれ、ちくとん計り褒めやんしよ、先づ賑はしき顔見世の櫓の幕の紋尽し、とんから〳〵〳〵と、太鼓の音をきく桐や、初日今やとまつかは菱、はやう御顔をみつ柏、名人の名をあげ羽の蝶、蛇の目のあく方立役も、一座くるめて束ね綿、三国一の富士の丸と、ホヽやつちや〳〵　（紋づくし）

先づは目出度き顔見世を、贔屓連中がまつ葉紙、中へは入れば東西に、連中手うちのはな紙を、飾り立たる賑はひや、市をなすかや今宮の、笹にちやう紙ゑびす紙、飲めや謡へやたん冊紙、さぞや座元のみの紙は、大かた紙やかねのかみ、大ばんし小判紙も、きりゝ〳〵と巻紙で納まる所はおくら判紙、皆一束の評判に、頭取元締ひと締も、当りましたと一様に、大極上でのべ紙と、やつちや〳〵　（紙づくし）

一読して明らかなように、これは特定の役者に対する褒め詞ではない。「目出度き顔見世」の初日に、大手・笹瀬の手打連中が述べ立てたものと忍頂寺氏は推測されたが、その通りであろう。また、氏はこれに続いて「上方のほめ詞は、前記少数の例から判断すれば、此等は何れも」（傍点は引用者）江戸と違って褒めるべき役者名、狂言の外題、日時などが「明確にされて居無い」と書いておられる。従って前掲一から六の資料はそのような褒め詞であったことになる。

ところがここに「新板役者誉ことば」と題する一冊ものの刊本がある。その文句は何々尽しである点では前記の褒め詞と同様であるが、内容は十二名の役者一人一人を対象とする褒め詞の「集」であって、そこには、それぞれの役者の特定狂言における舞台姿を描いた挿絵が添えられているから、それによって、それぞれの褒め詞が何年何月何座のどの狂言の時のものかを察することができる。その点では江戸の褒め詞に近いが、十二名もの役者の褒め詞集である点では、江戸にもその類を見ない。

しかしこの本は別に今新しく世に出たというようなものではない。そのうち数名分の褒め詞は、『日本名著全集・歌舞伎脚本集』の「天満宮菜種御供」の翻刻の中に、挿絵とともに影印（凸版）で収められている。ただ、翻刻中に何の説明もなく掲げられているから、忽卒に読めばこの翻刻書の挿絵の一種として見過ごされてしまうような扱いになっている。

それはともかく、本書を上方褒め詞の文献として見ると、目下のところ、管見の限りでは非常に珍しいものであり、歌舞伎史の資料として興味があるので、本誌を借りて影印と翻刻を載せ、若干の注

を加えることとした。

まず底本の**書誌**を記す。

一　書名　「新板役者誉ことば」（題簽による）。

二　所在　東京大学文学部国文学研究室。

三　表紙　原表紙。黄色無地。

四　題簽　原題簽。「新板役者誉ことば」（題簽の下部に「全」とあるのは書入れ）

五　体裁　一冊。袋綴。縦二一・六糎×横一五・〇糎。匡郭は四周単辺（縦一八・四糎×横一四・〇糎）。行数は十六～十七行。丁数は六丁半。丁附（一、三～七）。板心「ほめ詞」。

六　刊記　「京寺町松原上ル町　菱屋治兵衛板」。

七　印記　「平出氏書室記」。平出氏は近代の愛書家平出鏗痴である。なお本書は「平出氏蔵書目録」所載。

八　表紙には題簽の外に「水八十二　全一冊」と墨書した貼紙がある。

九　東京国立博物館に同板の一本がある（替表紙、替題簽）。

次に**内容**および**刊年**であるが、対象となる役者十二名の出演狂言は挿絵によって判明し、かつ、それは四つの狂言に整理されるので、役者を狂言ごとにまとめ、その狂言の上演年月と劇場、およびその役者の役名を示すと次のごとくである。

○伽羅先代萩　（安永六年四月十日より、大坂嵐七三郎座、三の替。浄瑠璃「伽羅先代萩」に先行する歌舞伎狂言である）

嵐文五郎　秋篠平八　（四ウ）
中山来助　政岡　（五ウ）
浅尾為十郎　眼通坊　（六オ）
中山文七　松ケ枝節之助　（六ウ）
花桐豊松　沖の井　（七ウ）

○天満宮菜種御供　（安永六年四月十五日より、大坂小川吉太郎座）

三桝大五郎　紀の長谷雄　（三オ）
小川吉太郎　宿禰太郎　（三ウ）
沢村国太郎　尼松月　（四オ）
嵐　雛助　藤原時平　（五オ）
尾上菊五郎　菅丞相　（七オ）

○義経千本桜　（安永六年九月十七日より、大坂小川吉太郎座）

山科甚吉　権太女房　（一オ）

○大自在雷子宝貨（だいじざいかみなりのこだから）　（安永六年十一月三日より、大坂市山太次郎座）

嵐三五郎　都の良香　（一ウ）

これによって明らかなように、本書は安永六年中に大坂で上演された狂言に出演している役者に対する褒め詞集である。刊行は恐らく安永七年春であろう。

板元の菱屋治兵衛は浄瑠璃丸本・浮世草子等を出版しているが、西川祐信画の「絵本貝歌仙」「絵本姫小松」をも刊行している。なお、本書挿絵の画風も上方に多い西川風である。

次に翻刻と注に関する**凡例**を記す。

一　仮名は現行の字体に統一した。

二　漢字は常用漢字のあるものはこれを用い、ないものは正字体を用いることを原則とした。ただし左の文字は当時の用字を再現した。

臥　躰　枡　桝

三　仮名に漢字を当てる場合は、底本の仮名は振仮名に残した。底本の漢字に振仮名のある場合は、その振仮名には〈　〉を付して区別した。なお、掛け詞になっている語の仮名に漢字を当てる場合は、その褒め詞の尽しものの趣向を生かすように留意した。

四　仮名には濁点を補った。

五　底本の句読点は・一種であるが、そのほかに読み易くするため適宜一字あきの処置を施した。

六　底本の虫損の箇所は東京国立博物館本によって補った。脱字は［　］の中に補った。

七　翻刻には簡単な注を添えたが、それは当該役者の経歴や特色、当時置かれた立場などを、その褒め詞がどのように取り上げ、または反映させているかを理解するためのものであって、いわゆる語釈の注は原則として付けなかった。

なお、本書の印記について渡辺守邦氏に、上方褒め詞の刊本の所在について大橋正叔氏に、それぞれ御教示をいただいた。記してお礼申し上げる。

新板役者誉ことば

山科甚吉　京町づくし

しばらく〳〵　ちくとんばかり誉め申そふ．浪華上りの御めみへ聞しにまさる御よそほひ．其風俗も葭屋町．見るに思ひの升屋町．寺町へんの坊様も．衣の棚を脱ぎ捨て、通ひ来るわの御幸町．色よき返事松屋町．せめて一夜のお情に．私もほんに相の丁　末吉丁のいつ迄も．たがいに心瓦町．約束堅き石垣の．町々女中子達まで．ゑい〳〵声に引高瀬．柳の馬場さん腰かゞめ．姉が小路に手を引れ．われも〳〵と押小路．高場桟敷も花屋町．錦を飾る賑ひは．是ぞ名におふ長者町．花の都にいつ迄も．名を高倉や山科の甚吉丈と　ホヽ、やつちや〳〵

権太女房おせん
引留め異見する
いがみの権太
藤川柳歳　（一オ）

○山科甚吉――大坂の浜芝居出身。安永初年より大芝居に出勤。安永四年正月、若女形上上〈役者酸辛甘・坂〉。同六年正月、若女形上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。芸も人気も上昇中である。

○京町づくし――甚吉は安永六年十一月京都三枡次郎吉座に出勤。京都に初上りであったことと、山科の姓が京都郊外の地名である

ことによる。

○浪華上りの御めみへ――以下、大坂から京へ初上りの顔見世を誉める詞。

○聞しにまさる御よそほひ――安永五年正月刊『役者大通鑑（坂）』に「今での衣装のはり込ミ人」、同七年五月刊『役者大矢数（京）』に「是まで大坂にては見事な衣装をきる人じやと噂を聞てゐるが」と言われている。

○其風俗も葭屋町――美しい衣装を着て「花やか」〈役者位下上・坂、役者世鳳凰・坂、その他〉と評されていた。「風俗」はみなり・よそおいの意。

○女中――以下女性に人気の高いことを言う。甚吉の京都初舞台の評判にも「見れば見るほどかわいらしいものじやぞ」とある〈役者金色・京〉。

○高場――土間の中で一段高く設けた観客席。「見物場の少し高きを高場といふ」〈歌舞妓事始〉。

○権太女房おせん――安永六年九月大坂小川吉太郎座上演「義経千本桜」の人物。山科甚吉所演。図は三段目椎の木の場面。

○藤川柳蔵――安永六年正月、立役上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。

嵐三五郎　桐づくし

江南の橘　江北に植ゆれ共、変らぬ色や又と世に類嵐の雷子丈
お江戸上りの訛なく、やはり古文字の桐の薹、とう〳〵和実の立者
と　五山おろせし桐の花、五七三五郎よい〳〵の、噂を聞くに妹と
背の桐の花ある仕こなしに、朝は疾うから〳〵の、太閤桐に我一と、
爺も婆も娘子は、取分け気にも扇の地紙　五三の桐の極印打た　実
かね箱のやつし方と　ホヽ　祝して申す

春藤玄蕃
良香を討たんとする
嵐音八
都の良香
矢の根を見て
親の敵を知る　（一ウ）

○嵐三五郎――二代目。元文四年十一月、八歳で父の名を襲名。宝暦四年十一月、二十三歳で元服してやつし方となる。翌五年正月、立役上上吉〈役者删家系・坂〉。安永五年正月、立役上上吉〈役者大通鑑・江〉。同六年十一月、大坂市山太次郎座顔見世「大自在雷子宝貨」に出演。四十六歳。

○桐づくし――三五郎の紋は丸に桐の字。

○江南の橘　江北に植ゆれ共――三五郎が明和七年十一月から七年間江戸に出勤し、この安永六年十一月に大坂に帰って来たことをふまえた修辞。

○雷子丈――雷子は三五郎の俳名。なお前記顔見世狂言の外題は、三五郎の帰坂を迎えてこの俳名を組入れている。

○古文字の桐の薹――古文字とは、江戸風の役者にならずに元通りの大坂役者であることを暗示する。

○和実の立者――和実は和事に実事を加味した役柄。三五郎は「む

まい所のある和実の花」〈役者大通鑑・江〉などと称され、和実では小川吉太郎と双璧とされていた。

○妹と背の詞の花――濡事のセリフに巧みなことを言うのであろう。この時の顔見世狂言でも、若殿姿で目見得の奉公人に惚れられ「色事の仕内さりとは手に入たもの」〈役者金色・坂〉と評されている。

○疾うから〳〵――櫓太鼓の音。「〔二ノ替リ狂言ヲ見ニ行ク娘ガ〕親の死めにかけつけるよりは気をもみていそぐも。はじまり太鼓のとうから〳〵と口なふしてよぶゆへぞかし」〈役者色仕組・一之巻〉（傍点は引用者）。なお、太鼓から太閤と続ける。

○娘子は．取分け――三五郎はやつし方で「男つきよく小手きゝにて．和らかみ有て」〈新刻役者綱目〉女性に人気があった。

○実かね箱――実事を兼ねている（「和実の立者」の項参照）の意に、座本をもうけさせる人気役者の意の「金箱」を掛ける。

○やつし方――若殿などが遊蕩のはてに賤しい姿となってなおも濡事などするような、色男役を得意とする役者。「歌舞妓役者の色男をやつし方といふ」〈浪花聞書〉。

○春藤玄蕃――「大自在雷子宝貨」で都の良香を討とうとする敵役。

○嵐音八――二代目。立役上上吉。元来道化方だが、「此度は立役にて出て敵役の仕打　春藤玄番と成て大前髪」〈役者金色・坂〉。

○都の良香――嵐三五郎所演。親の敵は「〔春藤〕郡領也とかた」る場面もあった〈役者金色・坂〉。

三桝大五郎　舛づくし

しばらく〳〵　ちくとん計り誉め申そふ　舛づくしに　計ては、粋も不粋も　押　なべて　三　升　行升　塞き合い升．見ての心の奥底を．計り升かや　かほど迄　難　くせもなく一合に．贔くは座本の黄金舛　幾　千代迄も　鶴　かけの．舛々贔屓末かけて　こゝに居桝を願ひ升．わしも贔き升　人様も．黒いも白の舛型も　舌に二重の升云わぬ　若手の衆が似せ升も　根が名人の箱舛に京も浪華も一ッ升舛に．たゞよい〳〵と評　判は　きつと確な焼印桝と　ホ、　うやまつて申す

紀の長谷雄　大五郎　（三才）

忍びの侍

○三桝大五郎――初代。元文四年十一月よりこの名を名乗り、明和四年三月立役上上吉〈役者御身拭・坂〉、安永四年正月立役功上上吉〈役者酸辛甘・坂〉、同六年正月立役大上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。上方の大立者であった。六十歳。

○舛づくし――大五郎の屋号「舛屋」による。

○三升――見ますに掛ける。

○一合――桝の一合に一統または一同を掛けていう。あるいは大五郎の俳名一光を掛けるか。

○鶴かけ――鶴は千代の縁。また大五郎の紋の鶴の丸につながりつつ、弦掛け桝と桝づくしになる。

○ここに居桝を願ひ升――大五郎は京都大坂の間を往来していたので、大坂の見物がこの土地にいてほしいと願う。
○京も浪華も――京都でも大坂でも好評を得ていたことを言う。
○紀の長谷雄――安永六年四月大坂小川吉太郎座「天満宮菜種御供」の人物。この図は三つ目京都広小路の場で、藤の定国が盗み出した太政官の印を、仕丁姿の長谷雄が奪い返す場面。なお『名著全集・歌舞伎脚本集』は本作台帳の翻刻を収めるが、その四六九頁に本図が掲載されている。

小川吉太郎　川づくし

しばらく〳〵　重かさねて誉詞　瀬見の小川の流より　清き諸芸を御手洗や　名は高野川　宇治川の　洒落けもなくてきつぱりと　大手大井の川波も　とん〳〵しやん〳〵馬入川　口跡までも吉野川　あた賀茂川の濡事は　手に入間川　愛染て　川いらしいと娘気に　惚れた田上野冽〳〵と　大和の川やもろこし迄　贔屓小塩の川岸に　双ぶ岡川　手拍子の音羽の川の劣らぬは　京と浪華や猪名川迄　見に野守川　淀川の　水に映へあふやつし方と　ホヽ　うやまつて申す

宿禰太郎
小川吉太郎
女房小桜
徳次郎

（三ウ）

○小川吉太郎――初代。明和八年度より安永八年度まで大坂にて座本。安永五年正月立役上上吉〈役者大通鑑・坂〉、同八年正月立役至上上吉〈役者男紫花・坂〉。四十一歳。
○川づくし――吉太郎の紋は丸に川の字。
○口跡までも――当時、特に口跡をよしとする評は評判記には見えないが、「全躰此人の芸。京の風に叶ひ何をせられてもわるひ事なく」〈新刻役者綱目・三〉とされている。
○濡事――「濡事と成てはとんと申分はどなたも有まじ」〈役者一陽来・坂〉。
○娘気に惚れた――評判記にたびたび「例の和らかみ」を称されていた和事の名手で、「菅原」の桜丸、「双蝶々」の与五郎、「芦屋道満大内鑑」の保名などを役どころとする役者であったから、若い女性の人気は当然である。
○やつし方――「近年掘出しのやつし形なり」「近比にては染松七三郎の死後。是ほどのやつしなし」〈新刻役者綱目・三〉と称されていた。
○宿禰太郎――「天満宮菜種御供」六つ目、河内宿禰太郎館の場の人物。覚寿の娘小桜の夫。この図は父土師兵衛に操られて小桜を殺す場面で、『名著全集・歌舞伎脚本集』五二〇頁所収。ただしこの役は吉太郎の最も得意とする役柄ではない。
○徳次郎――三桝徳次（治）郎。安永六年五月若女形上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。

沢村国太郎　　国づくし

しばらく〳〵　刃するどき其答丈．少し計リは誉申そふ　国は数〳〵多けれど．まづ山城より流来て．此津の国に足とめて　娘姿の若狭より　信濃よさには打込んで．誰が隠岐をれと言ふ人も．なきは諸芸を駿河ゆへ．三河す顔の傾城風．陸奥ごとなどの面白さ．わしや壱岐ついたと見物が．安芸れて物も石見潟　四国上々きつしりと．実立者に違はぬは　大隅角や．どこの対馬の浦までも．よいや〳〵の誉詞．伊勢い顕はす品者と　ホ、　うやまつて申す

尼松月　　国太郎　　（四オ）

○沢村国太郎――初代。宝暦二年正月若衆方上上吉〈役者艶庭訓・京〉。同三年十一月若女形となったが位付は上。この時より明和二年秋までの十三年間、宝暦六年の一時期を除いて京都で座本を勤めた。明和二年十一月大坂に下り、明和七年十一月京都に上ったが、安永二年十一月より再び大坂に出勤していた。この間、若女形としては地芸の上達が遅く、宝暦十四年正月上上吉となったのちも、「人品器量はよけれ共．仕内水くさく　色気は有ながらない様に見へ　きのどく」〈役者不老紋・坂．明和七年正月〉などと評されていたが、安永六年四月の「天満宮菜種御供」以後めきめきと評判を上げ、翌七年正月、若女形巻頭上上吉ほうび付きの評を得て「今是程の若女形はない様に成られたと思ふが」と言われるに至る〈役者金色・坂〉。所作事を得意とし、芸風は華やかであった。三十五歳。

○国づくし――「国太郎」の国による。

○刃するどき――若衆方出身で、その頃は「前髪にてのあらごと．江戸風のつらね」〈役者艶庭訓・京〉で好評を得た役者で、若女形になってからも女武道風の立廻りのある凛々しい役をよく演じていた。例えば明和八年十一月京都三枡徳次郎座「都吉野帝閣」のよもぎふの役は、忍びの者を刺し殺して死骸を隠したり、親の敵とのたて、白旗の奪い合いなどを演じて好評であった〈役者歌真座・京〉。安永二年十二月大坂小川吉太郎座「ひらかな盛衰記」では巴御前の役が好評、千鳥の役はやゝ不評である〈役者位下上・坂〉。

○其答――国太郎の俳名。

○まず山城より流来て――京都出身で明和二年十一月初めて大坂に下った。その後大坂―京―大坂と移り、安永六年は大坂小川吉太郎座に出演中。

○娘姿――美貌の女形で「さりとてはうつくしい事．きれいな事にかけてはつゞくものはない」〈役者歳且帳・京、明和八年正月〉といわれている。

○傾城風．陸奥ごとなど――美貌で華やかであったから、傾城の役や濡事は見ばえがしたものと想像される。

○四国上々――至極上々にかける。

○実立者に違はぬ――「実」は真に、ほんとうに。「立者」は一座の中心となる役者。国太郎は明和九年三月刊『役者物見車（京）』以後、たびたび若女形巻軸・若女形巻頭に据えられ、安永四年正

月刊『役者酸辛甘（坂）』では「今年は大立者ゆへ云々」と書かれている。

○尼　松月――「天満宮菜種御供」六つ目の松月尼。覚寿の三つ子の娘の一人松ケ枝姫。出家しているが斎世親王に恋い焦がれ、親王と紅梅の仲を嫉妬し、二人が鶏鳴を合図に立ち退くことを知り、鶏を鳴かせまいとする一念で鶏娘となる。

嵐文五郎　文づくし

しばらく〳〵　ちくとん　計　誉申そふ　実も山椒は小粒でも、からげて流す七夕の　文よりつもる芸の功　いつでも一座の結び文、京へもちつと恋の文と、呼べど返事の内証で　日延べの文は御贔屓が、逢てやる文　今少し、からが有ばと　悔文、浜から爰へ投げ文は、きのふや今日の用事文、たま玉づさのたま〳〵に、見てはびつくりするほどに、上つた風の散らし文、文車ならで小廻りの、きくは上手の書残し　かへすがへすも猶々も、たゞ御出世を祝義文　目出度候に　穴のない　やうにと言ふも　恐惶は云ハれぬ釈迦に謹言と　ホ［ゝ］　敬白

秋篠平八　文五郎
海存より使ひの侍　（四ウ）

○嵐文五郎――立役上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。子供の時、大坂竹田芝居の役者であった。前名嵐金妻。明和八年十一月嵐文五郎と改名。

○文づくし――「文五郎」の文による。

○山椒は小粒でも――「此人は是まで小兵な〳〵と云立られて」小さい人物に扱うことが多かった〈役者世鳳凰・坂〉。安永二年正月刊『役者一陽来（坂）』の文五郎評には、「（頭取）『ヒリ〳〵する程小廻りのする人』（付ビン）『又山椒は小粒でもといふことか　あんまり古いぞ』（頭取）『又〳〵急度誤りました』」とある（「付ビン」は付鬢組の略で評判の仲間）。以前から行われていた文五郎評のきまり文句。例えば嵐金妻時代の評に「山椒は小粒でもきびしい〳〵」〈役者歳旦帳・坂〉。

○京へもちつと恋の文と――明和五年度に上京して一年間尾上久米助・尾上紋太郎相座本の一座に敵役嵐金妻で出演、好評であった。同年正月刊『役者党紫選（京）』目録の見立評に「見物のうけはむしやうによしみね」とある。それ以来九年間大坂出勤で、上京していない。

○今少し、からが有ば――「から」は体つき、体格。

○見てはびつくりするほどに――明和九年以来、安永五年まで立役上上吉であったが、安永五年秋以後「めき〳〵と狂言を押上られて　何かに付て見よう成て」「何に一つおとつて見へる事なく」〈役者世鳳凰・坂〉と評よく、この年（安永六年）から上上吉となった。

○小廻りの、きくは――「山椒は小粒でも」の注参照。「さりとは器用にて調法で」とも評される〈安永四年三月刊『役者芸雛形（坂）』〉。

○秋篠平八――「伽羅先代萩」（安永六年四月、大坂、嵐七五郎座）

の登場人物。志田家の忠臣で、編笠をかぶり豆腐・油揚を売り歩きながら志田の家再興に苦心する。菅沼小助の弟（次の注参照）。

○海存より使ひの侍――海存は義経の家来であった常陸坊海存からその名を譲られた菅沼佐助。ここは、その佐助からの使いの侍である。なお、佐助の惣領菅沼小助は佐助から常陸坊の家の忍びの術を伝えられていて、その小助が浅尾為十郎の役「眼通坊」である（為十郎の注参照）。嵐文五郎の役「秋篠平八」は小助の弟。

嵐　雛助　　風づくし

しばらく〳〵　古めかしくは候へど　上桟敷　下桟敷　場の御連中も暫しがほど．お邪魔申すも贔く気から．外にたぐいも嵐吹く．

若立役　嵐づくし　追手の舟の順風に．帆かけて走る御出世を．見れば雲雀の射るよりも　上る仕わざはしみ〴〵と．身に染む春の風　仕打凉しき女形．悪はするどき木枯に．立づく者も山おろし．花実のふたつを真風に吹き　東風は好かぬと言人なく．末広がりの評判に　廻りくる〳〵風車　りん〳〵ちん〳〵風鈴の　音より高き振り出しの．風の薬の効目よき　古今独歩の稀者と　ホヽ敬白

左大臣藤原の時平
雛助
てんらいけい
十郎兵衛

（五才）

○嵐雛助――初代。嵐小六（初代）の子。初め若女形。宝暦九年正月若女形上上。明和九年三月若女形上上吉となり、「近年めき〳〵と大立者になられたぞ」〈役者物見車・京〉と称された。しかし、すでに明和五年十二月大坂山下八百蔵座「双蝶々曲輪日記」で濡髪長五郎とおてるの二役を演じ、濡髪で当りを取るなど、立役でしばしば成功し、「女形の商売をおわすれか（中略）むしやうにつよ気になつての立役」〈役者酸辛甘・京〉と言われ、安永四年九月京都藤川山吾座「一谷嫩軍記」で熊谷と六弥太を演じて立役に転じた。翌五年正月刊『役者大通鑑（坂）』には惣巻軸立役上上吉、翌安永六年正月刊『役者世鳳凰（坂）』では「惣巻頭立役上上吉」に至っている。

○風づくし――「嵐」の姓による。

○上桟敷下桟敷――「うわさんじき」は「うわさじき」で二階桟敷、「したさじき」は土間の両端にある桟敷。観劇の費用は土間よりはるかに高額で、富裕な観客の席。

○場――土間。桟敷にくらべると安い大衆席。

○お邪魔申す――誉詞は舞台の進行を中断して述べられる。

○若立役――若衆方・若女形から元服して立役になったばかりの若い役者をいうが、ここでは雛助が若女形から二年前に立役に転じたばかりなので若立役と言った。年齢ではすでに三十七歳である。

○御出世――若女形の時、宝暦七年の「上」から明和九年の「上上吉」まで、十五年間で到達しているし、立役に転ずると二年後の安永六年正月には「惣巻頭立役上上吉」の位置を占める〈役者世鳳凰・坂〉など、出世ぶりは急速である。

○上る仕わざ――前項参照。
○悪はするどき――安永五年三月「昔追風出入の湊」に獄門庄兵衛、同年十二月「新薄雪物語」に秋月大膳などを演じている。秋月大膳評は「只座した計にて見へと憎みをおもにして其中での色気を持た役目」〈役者花の会・坂〉とある。
○花実のふたつを真風に吹き――華やかな形容を見せる芸と実を重んずる地芸との両方を交じえているの意。
○振り出し――歌舞伎演技の「振り出し」ではなく、「振り出しの風邪の薬」と続ける修辞。
○古今独歩の稀者――安永六年正月刊『役者世鳳凰（坂）』には「誠に未曽有の出来もの」と称されている。
○左大臣藤原の時平――安永六年四月「天満宮菜種御供」の人物。「時平の大臣の仕打甚評判よき上、二役覚寿役にてこぞつて悦ばせ」〈役者金色・坂〉と好評であった。後年、時平は雛助の実悪での当り役のうち「大極上上吉」とされた〈眠獅選〉。
○てんらいけい――「天満宮菜種御供」の「唐使天蘭慶」〈役割番付〉。この図は二つ目・内裏記録所の場で、時平が道真を罪におとしたのち、天蘭慶のいましめを解き、時平の計略を助けた褒美の金を邸で受け取れと言う場面であろう。この図は『名著全集・歌舞伎脚本集』四六〇頁所収。また誤って五二七頁にも収める。
○十郎兵衛――藤川十郎兵衛。親仁方上上〈役者世鳳凰・坂〉。

中山来助　山づくし

しばらく〳〵　ちくとん計り誉め申そふ．見ればしつくり立役の姿仕打も中山の　山に譬へて申スべい　伊賀の山越打越して　また此度の大当り　下に岡山茶臼山　六甲山をあらはせば　誰も生駒と押合ふて　木戸はゑいとう礪波山．噂は四方に高尾山　浅間の山の　煙より．よふ〳〵の掛声は．並や大抵．浪除山　真田の山のしまりよき　武道の生粋　銀元も　宝莱山とホ、　うやまつて申す

乳人　政岡　来助
道ゑつ女房　紋治　（五ウ）

○中山来助――狂言作者松屋来助の子。中山文七の弟。前名二代目松屋来助。宝暦七年十一月より中山来助。明和九年より立役上上吉。安永五年冬から六年春にかけての「伊賀越乗掛合羽」の誉田内記等の好評で、同六年三月から立役上上吉〈役者花の会・坂〉。
○山づくし――「中山」の山による。
○伊賀の山越打越して――「伊賀越乗掛合羽」（大坂嵐座）は安永五年十二月から六年三月まで年を「打越し」ての続演。
○また此度の大当り――安永六年四月嵐座三の替り「伽羅先代萩」の大当り。「四月始つかたより出して六月迄打たり」〈伝奇作書残編〉。浄瑠璃の同名の作は天明五年の初演である。
○武道の生粋――当時来助の当り役には「伊賀越」の誉田内記、「先代萩」の政岡（女武道）があった。
○銀元も宝莱山と――嵐座の銀主（銀元。出資者）長柄屋新兵衛が「伊賀越」の大当りで大儲けして「是切ニて仕打を相止メ」たの

で嵐座が興行を続けられなくなった時、「中山来助工夫をして一座一人も退座致させず　給銀を五日目ヅヽに切払ひにして払ふ事」となり、「先代萩」も「伊賀越同様に大入大当りニ付　一座大によろこぶ」という記事が『大歌舞妓外題年鑑』に見える（『歌舞伎年表』が『攝陽奇観』とするは誤り）。どこまで信ずべきかわからないが、もしこの記事のごとくであったら、長柄屋の後に嵐座の銀主となった者にとっても、来助は「宝」だったであろう。

○乳人　政岡――「伽羅先代萩」の幼君のお乳の人。この図は女武道の仕所を描く。

○道ゑつ女房――「道ゑつ」は「伽羅先代萩」で幼君殺害の毒を調合する医者の名か。しかし演劇叢書本「伽羅先代萩」では大場道遠、その妻は小巻とあり、道遠は桐山紋治、小巻は松本次郎三の役となっている。また、政岡は八汐に「吾子の敵」と斬りかかる場面はあるが、小巻を斬る場面はない。しかるに八汐は桐山紋治の役（役割番付も同じ）であるから、この図の斬られている女は「八汐」の誤りであろう。因みに八汐は渡会銀兵衛女房である。

○紋治――敵役上上吉桐山紋治〈役者世鳳凰・坂〉。

浅尾為十郎　　為づくし

今を日の出の国崩し、芝居の為や見ての為　酷ふするのが芸の為、よい役もらへば為入レて　お為ごかしに家国を　押領するは己が為　扨も上手じや名人と　為て置たる銭かねも　厭はず出して為眇め、見るに偽りない事は　人の為じやと評判の、悪いを善いと口に酢を　為て言はれぬ人心、後の為より此世の為　根浮い悪の取捌き　為池よりも底知れぬ　深甚微妙　奥山氏と　ホヽ　うやまつてもふす

眼通坊　　本名菅沼小助　　為十郎　　（六才）

○浅尾為十郎――初代。安永三年三月、実悪上上吉となる〈役者位下上・坂〉。安永六年も実悪上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。四十三歳。

○為づくし――「為十郎」の為による。

○国崩し・家国を押領する・根深い悪等のことばは実悪の本領とする芸に対する褒め詞。ただし為十郎は小柄で小手の利く役者であって、生涯の当り役としては国崩しの大悪人は含まれない。しかし明和八年正月京都三桝徳次郎座上演「けいせい蝶花形」の小栗宗丹の演技は「大丈夫の悪の仕内出来ました〳〵」「此たびの小栗宗丹役などは、当時歌右衛門をのけて外に是程落付しぶとくせらるゝ人は覚へぬ、けしからぬ芸の上やう」〈役者色々有・京〉と評され、本格的な実悪の役に成功している（宗丹の役の内容は伊原敏郎著『近世日本演劇史』二六頁参照）。

○酷ふするのが芸の為――実悪の芸では、残酷な行為を平然とやるところが見せ場で、為十郎もそれを得意とした。その例として安永五年十二月から翌年四月まで続演された「伊賀越乗掛合羽」初演時の沢井又五郎評の一部を引いておく。「我云号の女房を見ごろしにするにくさ」「〔医者左内を〕しめころして妙薬を取　死骸の顔の皮をむいて立のく」〈役者花の会・坂〉。

○為（溜め）て置たる銭かね――「銭」は為十郎の屋号「銭屋」を利かせたものか。
○奥山――為十郎の俳名。
○眼通坊――「伽羅先代萩」の人物。山伏で、忍びの術を用いて鼠に化け、重宝の一軸を盗み取る。秋篠平八の兄で本名菅沼小助（嵐文五郎注参照）。後に松ケ枝節之助に討たれる。

中山文七　中づくし

ちくとん計り誉め申そふ　凡　中を集めては　申さずとても御存知の　諸芸由男の大立者　たゞ良い中に良い仕打　京で中京大坂で中の島迄受けも良く．お中が肝精　団七で当れば　中の若い衆は悦　中居は嬉しがる．中言云わず真直に　役者中間の立衆とは　山中たとへ船の中．中筒男の神様迄　中々嘘とはおつしやれず．曽我中村の兄弟も．及ばぬ伊賀の敵討　是もお家の箱の中．天地の中に又とまた　外に中山文七丈と　ホ、　うやまつてもふす

馬方六蔵　本名松が枝節之助　文七
医者　養仙　紋治　（六ウ）

○中山文七――狂言作者松屋来助の子。中山来助の兄。寛延元年十一月より中山文七（ただし宝暦三年から二年間和歌山文七）。明和九年（安永元年）三月より立役真上上吉〈役者物見車・坂〉。「上ミ方大立者」〈役者世鳳凰・坂〉であった。四十六歳。
○中づくし――「中山」の中による。
○由男――文七の俳名。以下「良い」「良く」を繰り返すのはこの名による。
○京で中京――寛延元年十一月、京都嵐三右衛門座に上って中山文七を名乗り、宝暦二年秋まで京都で活躍し、この年十一月より大坂に移ったが、明和三年十一月より同五年秋まで、および安永元年十一月より翌二年秋まで京都に出勤し、京都人にも馴染みは深かった。「中京」は「中づくし」に合わせた地名。
○団七で当れば――団七は「夏祭浪花鑑」の団七九郎兵衛。このころ大坂での団七役は見当らないが、明和三年四月十五日より姉川菊八座での「夏祭」の団七は「大当りにて大坂三郷町中はいふに及ばず．京の御ひいき方迄御下りなされ大入を取」ったという〈役者巡炭・京〉。その後、明和五年盆替りに京都市山助五郎座で演じて「京中一同の評判大入」であった〈中山由男一代狂言録〉。文七は男だての役を得意としていた。
○中――大坂新町遊廓。
○役者中間の立衆――前記「上ミ方大立者」の役者であることと、立衆（男だて）の役を得意としたこととを併せて言う。
○曽我中村の兄弟――曽我兄弟。曽我中村は「曽我兄弟住し所也」〈東海道名所図会〉。
○伊賀の敵討――「伊賀越乗掛合羽」（中山来助の注参照）の大当りを言う。「其年はせんだいより長崎まで芝居といへばいがごへで御ざつた」〈中山由男一代狂言録〉。文七の役は政右衛門で、生

涯の当り役となる。
○馬方六歳――「伽羅先代萩」の松ケ枝節之助の変名。四の詰で狂気をよそおって養仙に手桶の水をあびせる。
○医者　養仙――「伽羅先代萩」に登場する藪医者。竹原養仙。
○紋治――中山来助の注参照。

尾上菊五郎　梅づくし

ちくとん計り誉め申そ　年の内に春告鳥の臼見世より　此浪花津に咲や此花の粧ひのつしりと　立木の楚　若〳〵と　何をさせても好文木　たゞ一並の立者と　肌を軒端の梅が香や　酸いも甘いも呑こんで　憎でかためた仕付梅　細かい小梅　一と言、煮梅と下らぬ名人は　誰が白梅と言人なく　とんと豊後の梅じや物　アノ信濃梅見に行こと　梅干婆も嫁に手を　引れて八重の腰打て　お庭梅永ふ見ましよと　木戸は入れど場もなくて　やう〳〵桟敷の八間梅　買ふ紅梅はなけれ共　贔屓余りて飛梅の　なくて幾年此角に　香や隠れずと匂ひ艸　幾春〳〵も鶯の　ホ、法華経　きやうといはたゞ三郷の評判と　ホ、　敬白

菅丞相　菊五郎
荒藤太　他人

（七オ）

○尾上菊五郎――初代。京都出身。若衆方から若女方となり、寛保二年春大坂佐渡島座で市川海老蔵（二代目団十郎）の鳴神上人に雲の絶間に扮して大当りを取った（「雷神不動北山桜」）。同年十一月江戸に下り、宝暦二年十一月立役に転じ、明和三年十一月京都に帰り、同六年十一月再び江戸に下ったのち、安永二年十一月大坂に上る。安永三年三月刊『役者位下上（坂）』では「惣巻軸立役半白極上上吉」とされた。このころは「親玉」と称され、和実の名手とされている。安永三年十一月京都に上ったが「是ぞといふはね（当り）もなかつたぞや」〈役者世鳳凰・坂〉という調子で、安永五年十一月再び大坂に下った。しかし大坂の見物は大いに期待して迎え、「乗込の日より格別の賑ひ」で「当年（注――安永六年）はたのしむことだらけと申て計おりますぞ」〈同書〉と書かれている。六十歳。
○梅づくし――菊五郎の俳名梅幸による。また、この時菊五郎の扮する菅丞相と梅との縁にもよるのであろう。
○年の内に春告鳥の臼見世――芝居の正月といわれる顔見世興行は通例十一月に行なわれ、安永六年度の小川吉太郎座顔見世も五年十一月一日初日で幕を明けている。依って年の内に春を告げると言った。
○此浪花津に咲や此花――菊五郎が京から大坂に来たことをさす。「此花」は梅。
○木戸――劇場の入口。
○場――土間の見物席。
○桟敷の八間梅――桟敷の八間目に梅（うめ）をかけた。桟敷の舞台に近い方から数えて八つ目。
○此角――大坂の角の芝居。この年小川吉太郎座本で菊五郎が出座している。

○菅丞相――「天満宮菜種御供」の人物。菊五郎は「菅原伝授手習鑑」の菅丞相を得意としていた〈新刻役者綱目・二、明和八年五月刊〉。『古今役者大全（四）』（寛延三年三月刊）に「京にゐられし時より北野へあゆみをはこばれ　今江戸にても湯島の天神へ信拝おこたらぬよし」とあり、天神信仰が篤かったと思われる。なおこの場面は「天満宮菜種御供」八つ目の末で、時平の叛逆を知った丞相が憤怒の相を顕わし、荒れになるところ。この図は『名著全集・歌舞伎脚本集』五六四頁所収。

○荒藤太――白太夫の息子。時平の内命を受けて丞相を殺そうとする。

○他人――二代目三枡他人。この年立役上上〈役者世鳳凰・坂〉だが、前年まで敵役。三枡大五郎の養子で、のち二代目大五郎を襲名する。

花屋の松と　ホ、うやまつて申ス

沖の井　豊松　（七ウ）

○花桐豊松――二代目。大坂の浜芝居出身。明和四年、柏井座若女形巻頭上上吉〈役者御身拭・坂〉。明和五年度より大芝居に出勤、若女形上上✝〈役者党紫選・坂〉。安永六年、若女形上上吉〈役者世鳳凰・坂〉。

○松づくし――「豊松」の松による。

○誉つくされぬ品形――伊原敏郎『近世日本演劇史』には「容貌又甚美ならず」と記し、事実、明和・安永期の評判記には容姿の美を称する評判はない。しかし若女形に対する誉詞としては、この種の言辞は必要であったか。

○地味な仕打――明和六年正月刊『役者千鼠屑石（坂）』に「まそつと花が有ばよいに残念〳〵」とあり、安永年代に入ると「何でも間に合　きよう肌」〈役者一陽来・坂〉等の評が散見する反面、以前は女形のやわらかみに欠けていたらしく、「近年和らかみを専らにして」〈役者清濁・坂〉とか「近年めき〳〵とやはらかみつきて」〈役者大通鑑・坂〉と言われるようになるのも安永期である。勤めた役から見ても華やかで美しい女形ではなく、地芸を主とする地味な役者であった。その代り「うれい事には感心したぞや」〈役者一陽来・坂〉との評があり、安永五年末からの「伊賀越乗掛合羽」（前出）でも、政右衛門女房おたねに扮して「子にわかるゝのうれい　かくべつしつとりけが付ましてうれしうご

花桐豊松　松づくし

御免なれ〳〵。おじや［ま］も返り見申さず。誉つくされぬ品形。詞心も及ばれぬ　地味な仕打に旨みあり　鳳凰も出よ　のどけき花桐の豊。松づくしによそへては。中の芝居へ住吉の。松に愛嬌相生の。とりなりしやんと磯馴松。たゞよい〳〵の評判は高砂の。松我一チと。三保の松原　木戸口で。袖摺松も他生の縁。君ゆへならば月の夜も。忍ぶ笠松二夜三夜　五葉の松の張強く　銭掛松や鐘掛の。松でもいかぬ全盛の、所体は並び渚の松。千歳の松の末かけて　たゞいつ迄も姫小松。根引の松の連中も。変らずこゝに浪

ざるぞ」と言われている〈役者花の会・坂〉。

○鳳凰も出よ――鳳凰は聖人出現の瑞兆とされ、梧桐に宿り、桐と付合語〈類船集〉。紋所にも鳳凰に桐の紋がある。なお安永六年正月『役者世鳳凰』刊。

○中の芝居へ住吉――安永六年度、花桐豊松は中の芝居（嵐七三郎座）出勤。

○たゞよい〳〵の評判――花桐豊松の位付は安永年代に入ると若女形上上吉となり、それより次第に上って安永六年には上上吉となる。「さりとは見る度〳〵に上りめが見へますことの」〈役者芸雛形・坂〉との評もあり、人気上昇中であった。もっとも「さのみ仕内も見へず」〈役者男風流・坂〉などと、必ずしも好評のみではないが、地味な地芸が評価されて数年後の天明四年には上上吉に上る。

○沖の井――「伽羅先代萩」の人物。信夫庄司為村の奥方。政岡を助けて幼君を守る。

○将棋駒道しるべ

銀将
成て金に同じ
桂馬
成て金に同じ
香車
成て金に同じ

香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香
	角						飛	
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
	飛							
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香

ほしのとをり

一間づゝ行「此ほしの通いづく迄も行「此ほしの通いづく迄も行

王将　飛車　角行　金将

成て竜王となり　成て竜馬となり

一間づゝいづれへも行　一間づゝいづれへも行

歩兵　成て金に同じ

片かないろは
イロハニホヘト
チリヌルヲワカ
ヨタレソツネナ
ラムウヰノオク
ヤマケフコエテ
アサキユメミシ
ヱヒモセス

京寺町松原上ル町
菱屋治兵衛板
（後表紙見返し）

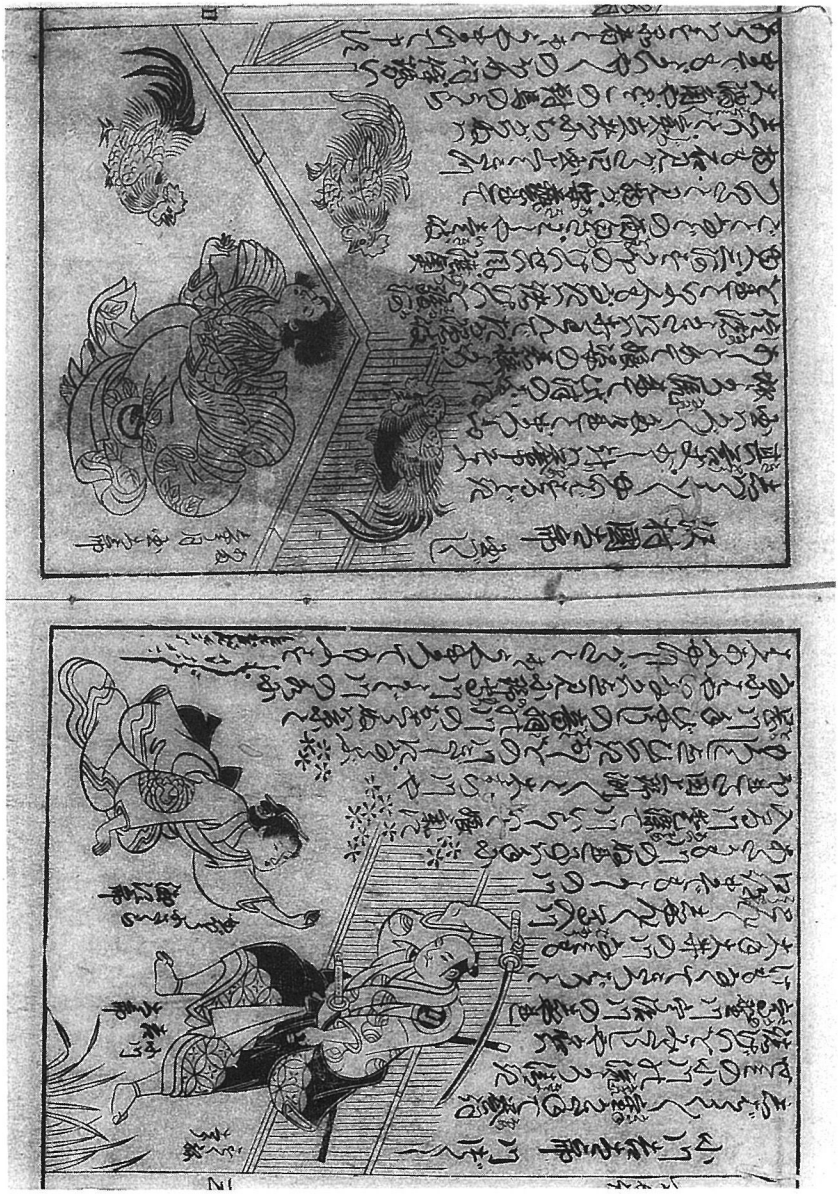
（表紙）

（本文）

(二十四)

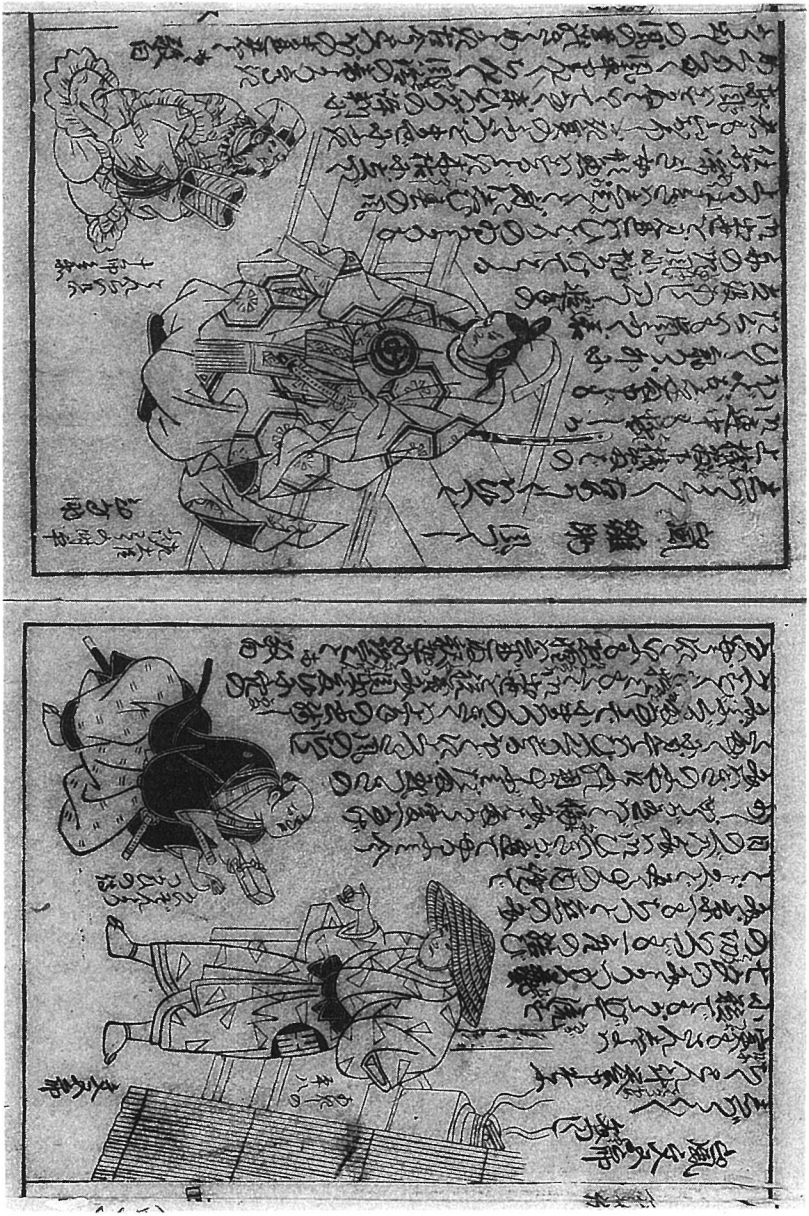
(二十五)

(四十)



(三十一)

(五十)



(十四)

(六十)

(六十一)

(44)

(45)

（後表紙見返し）

（十七）